

小学校教師のエンパワメントを目指す英語実践研究

大 石 海

(文教大学教育研究所客員研究員)

Research on English Language Practice for Empowerment of Elementary
School Teachers

OISHI KAI

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)

要 旨

本研究の目的は、小学校英語教育をクリティカルな視点から捉え直し、現場で授業を実践している教師たちをエンパワメントすることである。具体的には、ある自治体の初任者研修において、筆者が指導者として行った実践例を取り上げる。現場の教師は、英語力の有無や英語の非母語話者であるということが、その教師のことばを話す正当性を低下させるものではないということを認識することが必要であることを、研修を通じて確認した。

1. はじめに

英語学習・英語教育をめぐるのは、様々なパラダイムが確立されてきている一方で、音声指導をめぐるポリティクス、すなわち、誰の話す、どのような英語をモデルとすべきなのか、がいまだに問題としてある (Tsang, 2020)。そして、日本の小学校英語教育では学習指導要領や検定教科書において母語話者志向が強く表出している。大石 (2021) は、これを「制度としての母語話者志向」と定義している。こうした公教育における母語話者志向の問題は、多様な英語話者にたいする差別や排除を孕んでいる点で問題含みといえる。たとえば母語話者のみの発音指導を受けた児童は、「コミュニケーションの場で出会うさまざまな英語に対して『ネイティブっぽい英語ではない』という否定的な判断を下しかねない」(仲, 2020, p. 29)。実際、「新自由主義的グローバリゼーションのもとで推進されている英語教育の普及により、ネイティブスピーカリズムを伴う白人性のヘゲモニーは広く浸透」され、「世界中の教育や学習、教師

の雇用、教材において人種的偏見を再生産している」とKubota (2020, p. 715) は指摘する。英語話者の多様性を排除し得るようなこうした問題は、今後問い直す必要があると思われる。このような英語教育をめぐる現状の中で、小学校で外国語教育が実施されており、小学校の教師たちは日々の授業を実践している。

本研究の目的は、小学校英語教育をクリティカルな視点から捉え直し、実際の現場で日々英語の授業を実践している教師たちをエンパワメントすることである。小学校英語教育においては、多くの小学校教師が自分の英語力に不安を有していることはこれまでの研究で明らかにされている (猪井, 2014; 作井・山内, 2017)。そのような状況の中で、小学校において英語の授業は実際に行われている。小学校で英語を指導することを想定していなかった多くの教師たちが、日々の英語の授業に自信をもって臨めるようにすること、つまり教師をエンパワメントすることが、英語教育をめぐる公平・公正な社会の実現に寄

与できると思われる。

2. 英語教育におけるクリティカルな視点の必要性

英語教育研究においては、これまでも世界英語（World Englishes：WE）や国際共通語としての英語（English as a Lingua Franca：ELF）、英語帝国主義などのクリティカルな研究群が、その知見を生かしながら英語教育をめぐる不平等の問題や不公正な現状、社会的・経済的な問題を指摘してきた。しかしながら、それらの研究群がどれほど現実社会の変革に貢献しているのか、クリティカルな研究を推進してきた研究者たち自身が問い直している。たとえばKubota（2023）は、クリティカルな研究群が「社会的に公正で公平な言語教育の政策や実践とはどのようなものなのかについて、教師や保護者、行政や政策立案者などの見方を変えることに貢献してきたのだろうか」と問う（p. 5）。

本来、クリティカルな言語教育研究は、批判性を伴う省察だけではなく、変革のための行動を志向する。すなわち、クリティカルな言語研究は、言語の多様性を楽観的に主張することで言語をめぐる実際の不平等な状態をはからずも維持したり、決定論的な立場から悲観的に現状を捉えることに終始したりすることとは一線を画そうとする。言語をめぐる不平等や格差のある現実社会を楽観視するのではなく、かといってこの状態を悲観視して嘆くだけで終わろうともせず、むしろ現実社会にたいするポジティブな変革を目指そうとする。こうしたクリティカルな視点に立つことで、「英語が話せる/話せない」と二項対立的に捉える見方とは異なる、話し手自らの言語資源を駆使したり、教師や学習者を創発的（emergent）な話者として肯定的に見直したりすることができ得る。それにより、英語教育を多角的・多層的に位置づけ直し、その可能性を広げることができるのではないかと考

える。

3. 変革のための教育実践

小学校の教員でもある筆者は、英語教育研究の発展には、理論的側面に加えて、現場レベルでの実践にも焦点を当てる必要性を認識している。実際問題、クリティカルな英語教育研究の問題点として、その知的エリート主義的なスタンスや実践レベルで実際にどう行動したらいいのかという視点の相対的な欠如などが挙げられている（大石，2022）。つまり、Kubota（2023）が鋭く指摘するように、確かに「過去20年間で言語におけるクリティカルな研究は、この分野における批判的研究の知名度と正当性を確保してきた」が、「残念なことにその功績はアカデミックなバブルの中にとどまっており、クリティカルな研究者の出世には役立っているが、バブルの外には大きな影響を与えていない」（pp. 16-17）。ここでのバブルの外とは、実践レベルの教育現場である。クリティカルな研究群によってもたらされた知見がどのように現場の実践に応用され、教育実践を変革し得るのか、という点を考えなければ、英語教育の役割は結局のところ「現実社会をそのまま再生産する」ことに終始してしまう（Pennycook, 2021, p. 130）。

本研究では、埼玉県内のある自治体の初任者教員研修において、実際に筆者が指導者として行った実践例を取り上げる。筆者は、公立教員として現在までに10年間勤務し、今年度は勤務校で教務主任を務めつつ、3・4年生の外国語活動の授業を担当している。そして9月に、初任者教員研修において、外国語科・外国語活動の「魅力ある授業づくり」の指導者としてオンライン研修を行った。

4. 初任者研修における外国語活動・外国語科の指導

初任者教員に向けた指導をするにあたって

は、「魅力ある授業づくり」というテーマが事前に与えられていた。しかしながら、国語科や算数科など異なり、低学年の学級担任をしている教師は外国語の授業がない。中・高学年の学級担任であっても、自治体や学校によって教科担任制を採用していたり、専科教員がいたりするなど、外国語活動や外国語科の授業を担当しないこともある。初任者教員の現状が多様であるため、今回のオンライン研修では、ある学年のひとつの単元内容にフォーカスしたかたちで「魅力ある授業づくり」について思考していくというスタイルとはしなかった。むしろより広い文脈の中で、学級担任として英語授業に臨むということの意味や、学級担任の役割、教師自身が意識する言語観などを、クリティカルな視点から参加者とともに考えていった。

研修は、大きく次のような手順で進めていった。すなわち、①外国語（科・活動）における「魅力的な授業」とは何か、②指導スキルやテクニックの重要性、③学級担任として外国語（科・活動）に臨むということ、④「学習者モデル」としての学級担任、そして⑤「豊かな話者」としての学級担任である。

①～③では、自らが考える良い英語授業や言語教育観が何かを問い直しながら、小学校で英語教育に携わる人間として自らをどのように位置づければよいのかを考えた。そして、英語の規範性や前提とされているもの（母語話者志向や言語の固定性）をクリティカルに捉え、英語の授業に臨むにあたって、ことばの流動性や複雑性という側面により焦点を当てることの重要性を共有した。

④では、外国語の授業を行う学級担任の役割を「学習者モデル」と位置づけることの可能性や危険性について考えた。「学習者モデルとしての学級担任」とは、学級担任を「児童とともに英語を学ぼうとする学習者」（猪井, 2020, p. 165）と位置づけることで、学級担任＝英語のモデルとは異なる視点から学

級担任を捉える。前述の通り、小学校教員の多くは、自身の英語力や英語の授業力に不安を抱えている。「学習者モデルとしての学級担任」は、そうした教師たちの不安や心配を払拭し、自信をもって授業に臨むことができるようにするための役割論として現出したものである。この立場にたてば、現場の教師は児童とともに学ぶ存在として自らを位置づけることができ、自身の英語力等に引け目を感じる必要もなくなる。

しかしながら、この「学習者モデルとしての学級担任」には、課題もある。それは、母語話者志向をはからずとも強化してしまう可能性を内在しているということである。すなわち、教師が「学習者モデル」として英語のモデルとなるデジタル教材の音声や、ALTの話す英語を聞いて（児童に聞かせて）発音練習を繰り返したり、単語の反復練習を行ったりすることにより、言葉を学ぶ際の学習方略が母語話者志向になり得る。こうした学習プロセスを継続的に行うことは、学級担任の英語は聞かれるべきモデルとはなり得ないというメッセージを発信していることになる。これは、公平・公正な社会の実現と正反対である。

5. 「豊かな話者」としての学級担任

⑤の段階において、「学習者モデルとしての学級担任」という立場を肯定的に乗り越え得る概念として、「豊かな話者としての学級担任」という立場を提示し、初任者教員とその考え方を共有した。

「豊かな話者」(resourceful speakers) とは、自らのもつ言語的資源を利用できることや、スタイルやディスコースやレジスターの切り替えに長けていることを意味する。そして、複合的で複雑な言語的資源に加えて、セミオティック資源（モノや空間、身体の動き等）を駆使し、コミュニケーションにおいて適応・交渉させる見方である (Pennycook, 2014, pp. 14-15)。学級担任の教師は、毎日

の学校生活の中で、児童とコミュニケーションをとっている。そこにおいて教師は、文脈や目的、話す対象の児童に応じて、自らの可動的な資源を存分に用いている。たとえば、低学年の児童に向かって話す場面と高学年の児童に話す場面で、話すスピードや使用する語彙、繰り返し表現を臨機応変に変える教師を想像してほしい。つまり、現場の教師は、こうした意味で「豊かな話者」として日々振る舞っている。そして英語で他者とコミュニケーションを図るときも、「豊かな話者」という立場に立つことの重要性を、初任者教員と共有した。「豊かな話者」という視点に立つことにより、教室空間において、学級担任の英語も聞かれるべき英語のひとつとなり得る。この立場は、④の「学習者モデルとしての学級担任」のように母語話者志向的な方向に向かう危険性に抗したり、学級担任自身を「豊かな話者」と位置づけたりすることで、ことばをめぐる公平・公正な社会の実現に寄与することを可能にする。

6. おわりに

本研究の目的は、小学校英語教育研究に実践レベルで関わっている現場の教師をエンパワメントすることであった。特に今回は、初任者教員向けの教科指導の取り組みを実践事例として取り上げた。

日々英語の教育実践を行う現場の教師として認識すべきことは、英語力の有無や英語の非母語話者であるということは、その教師のことばを話す正当性を低下させるものではないということである。すなわち、自分自身を「ことばの正当な話者」として認識することが必要である。

クリティカルな言語教育研究によって現実社会を肯定的に変革していくためには、これまで培われてきた理論的視点を教育現場で実践すること、ローカルな実践をクリティカルな視点から捉え直すこと、現場での英語授業

を絶えず実践していくことが肝要である。行動を伴わないクリティカルな言語教育研究では、現実を変革し得ない。クマラヴァディヴェル (2016) は、非英語母語話者や英語をめぐって社会経済的に不当な地位に置かれている人々を「サバルタン」と表現し、次のように言う。つまり、「サバルタンは語ることができる。サバルタンは書くことができる。問題は、サバルタンは行動することができるか?である」(p. 82)。

引用文献

- 猪井新一 (2014). 「小学校外国語活動において教師はどのような時に成功感と失敗感を感じているか」『茨城大学教育実践研究』第33巻, pp.81-95.
- 猪井新一, 齋藤英敏, 小林翔 (2020). 『学級担任が創る小学校英語の授業』大学教育出版.
- 大石海 (2021). 「音声指導のポリティクスを生きる小学校教師: 小学校英語教育に関する語りの批判的ナラティブ分析」『言語文化教育研究』第19巻, pp.74-94.
- 大石海 (2022). 「小学校英語教科書の登場人物と英語音声の批判的分析: 表面的な多様性と母語話者志向」『東京大学大学院教育学研究紀要』第61巻, pp.109-118.
- 作井恵子・山内啓子 (2017). 「小学校英語に関する意識調査: 小学校教員の視点から」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要文学部編』第6巻, pp.49-67.
- 仲潔 (2020). 「変わりゆく言語－『言語』の多様性と『言語の機能』の多様性を探る」柴田美紀, 仲潔, 藤原康弘『英語教育のための国際英語論－英語の多様性と国際共通語の視点から』(pp. 50-66) 大修館書店.
- Kubota, R. (2020). Confronting. Epistemological Racism, Decolonizing Scholarly Knowledge: Race and Gender in Applied Linguistics.

- Applied Linguistics*, 41(5), 712-732.
- Kubota, R. (2023). Linking Research to transforming the real world: critical language studies for the next 20 years. *Critical Inquiry in Language Studies*, 20(1), 4-19.
- Kumaravadivelu, B. (2016). The decolonial option in English teaching: Can the subaltern act? *TESOL Quarterly*, 50(1), 66-85.
- Pennycook, A. (2014). Principled Polycentrism and Resourceful Speakers. *The Journal of Asia TEFL*, 11(4), 1-19.
- Pennycook, A. (2021). *Critical applied linguistics: A critical re-introduction*, 2nd ed. New York: Routledge.
- Tsang, A. (2020). Why English accents and pronunciation 'still' matter for teachers nowadays: a mixed-methods study on learners'. perceptions. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 41(2), 140-156.

